

放課後の校舎。廊下の隅々にまで夕闇の影が這い寄り、昼間の喧騒が嘘のように静まり返る頃。僕は体育館の隅にある、誰もいない更衣室で一人、冷たい床を雑巾で拭いていた。

窓から差し込む斜陽はどろりと赤く、年季の入ったスチールロッカーを不気味なオレンジ色に焼き付けている。キュッ、キュッ、と雑巾が床を滑る音だけが、コンクリートの壁に虚しく反響し、僕の孤独な作業を際立たせていた。

（はぁ……やっと終わりそう。残っていたら、教授に掃除を押し付けられるなんて……。僕、便利に使われすぎだよね……っ）

運動部の部室棟にあるこの更衣室は、独特の湿り気を帯びた汗の匂いと、使い古された金属の鉄錆びた匂いが重苦しく混ざり合っている。どこか雄々しく、肌にまとわりつくような落ち着かない空気。

僕は男だけど、この『雄』が凝縮されたような空間は、苦手だ。

仕事の能力に欠陥はない。

(そろそろだな……)

定刻。重厚な防音扉が音もなく開き、長身の影が滑り込んできた。

佐久間 爽英。二十代でこの帝国を築き上げたカリスマ。彼はラフな高級シャツの袖を無造作にまくり、圧倒的な存在感を放ちながらデスクへと歩み寄った。その唇には、常に相手を観察し、楽しむような微かな笑みが浮かんでいる。

「おはよう、旭真くん。……今日の紅茶、香りの立ち方がいいね。茶葉の配合を変えたかな？」

「おはようございます、佐久間社長。今朝の湿度と外気温を考慮し、抽出時間と茶葉の配分を微調整しました」

「いい判断だね。僕は君のそういう、理由のあるこだわり方が一等好きだよ」

窓から差し込む淡い光が、彼の端正な横顔を照らす。無駄のない輪郭に、均整の取れた目鼻立ち。だが、その切れ長の瞳は決して感情を映さない。ただ静かに、見る者の内側まで見透かすような鋭さを秘めている。

(……その辺の社員にも言っているくせに。いつかこの人に、心から気に入ってもらうことが、できたらな……)

佐久間社長は紅茶を一口啜ると、満足げに目を細め、一冊のファイルをデスクに置いた。

「さて、仕事の話进行しようか。この資料に目を通してくれ」

「はい。……これは、アダルト部門の四半期報告書……ですか？」

「そうだ。見ての通り、芳しくない」

「……そのようですね」

「特に期待されていた新型ローターの売上が、予測

を大幅に下回っている。これは我が社にとって、看過できない経営課題だ」

私は社長の放つ静かな圧に、背筋を正しながらデータをなぞった。

製品自体のクオリティは完璧なはずだ。洗練されたデザインに、肌に馴染む最高級のシリコン素材。

さらに、新型モーターによって、振動を五段階まで変えられる機能まで備えている。

(……論理的に考えれば、予測並みに売れてもいいはずなのに……。何が足りなかったんだ?)

とはいえ、私自身もこの製品を使ったことはない。

自社製品を買うのはどこか気恥ずかしいし、なにか道具を使うとしても、結局は他メーカーのものを選んでしまう。

「製品のスペックは完璧だ。でも、何かが欠けている。……何が足りないか、わかるかな？」

「あ、あの……」

「それなのに。それなのに、空太くんはちょっと優しくされたからって、テニス部のやつなんかと仲良くして……」

「テ、テニス部って……。まさか裕翔くん……？」

思わずそう呟くと、梓史くんは長い腕をゆっくり伸ばし、僕をロッカーとその腕の中に閉じ込めた。

「アイツと仲いいよね？ 好きなの？ でもアイツ、ヤリチンなんだよ。それなのに好きなの？」

「そ、そんなんじゃないよ！ それに、ちょっと待って……！」

「そうなの？ よかった。そうなんだ。なら、せっかくだしさ。もっとゆっくり話しようよ。……ねえ、そんなに怯えなくていいじゃん。俺、空太くんのことならなんでもわかってるんだから。……ねえ、空太くん。空太くんが隠している『秘密』も、俺はもう全部知ってるんだよ」

「ひ……っ！？ ひみつ、って……何のこと、を…

即座に拒絶した。

しかし、彼は微塵も動じない。それどころか、面白くて仕方がないといった風に、ゆっくりと椅子から立ち上がった。

こういう時の佐久間社長はひどく厄介だ。

「旭真くん。君は有能で、自分を律することに長けているカントボーイだ。そんな君が、このローターによって快樂を得ることができたら。それはきっと素晴らしいレビューになると思わないかい？」

「……馬鹿げた理論です。できません。そんな破廉恥なこと……っ」

「破廉恥？ 心外だよ」

佐久間社長は穏やかに笑いながら、獲物を追い詰める肉食獣のような足取りで私に近づいてくる。私はたまらず後ずさったが、すぐに冷たい壁に背中が当たった。逃げ場を塞がれ、彼の体温が伝わってくるほどの至近距離。

（近い、近い！時々この人は距離感がおかしいんだ……っ）

壁を叩くように彼の手が私の横に置かれた。彼の低い声が、私の耳元で囁かれた。

「これは低迷する事業を立て直し、会社の未来を守るための立派な『業務』だよ。旭真くんは、自分のちっぽけな感情を優先して、会社の損失を見過ごすようなこと、しないよね？」

「そ、それは……っ」

「もちろん、特別報酬はきちんと支給しよう。僕の最も近くにいて、僕の意図を完璧に汲み取れる有能な秘書である旭真くんに、やって欲しいんだ」

その鋭い双眸に見つめられると、蛇に睨まれた蛙のように、喉の奥が震えて声が出なくなる。ずるい。

そんな風に言われたら、私が断れるはずがないことを、この人は分かってやっているのだ。

「……お返事はどうかな？」

佐久間社長の指先が、私の顎をくい、と持ち上げた。強制的に視線を合わせられ、逃げることも許されない。

「……………は、い。……承知、いたしました。……佐久間社長」

絞り出すような私の答えに、彼は満足げに目を細めた。佐久間社長は小箱からピンク色のローターをつまみ上げ、私の目の前で弄んだ。

「いい子だね♡ では早速準備に入ろうか」

その言葉の意味を理解した瞬間、下腹部の奥がキュッと締まるような感覚に襲われた。

「さて……。まずはデータの精度を上げるための『準備』が必要だね。こっちに来てくれるかな？」



そう言ったかと思うと、彼の指は迷いなく僕のおまんこを、下着越しに強く押し潰すように撫でた。

「ひゃうんっ！？……あ、あッ♡」

「うわ……。まだ触り始めたばかりなのに、もうこんなに熱いよ♡……空太くん、本当はこういうの、嫌いじゃないんだね♡」

（うそ……。下着の上から、クリを……。押し込みながら、グリグリって……。やだ、恥ずかしいよお……。ッ♡）

「や、め……。ンッ……。ああ♡ あ、くん……。っ♡」

「ここ、触るの気持ちいい？♡ いいみたいだね♡ ほら、指の動きに合わせて、おまんこがヒクヒクしてる♡……。隠さなくていいんだよ。俺が全部、愛してあげるから♡」

「ちが、う……。ッあ♡ はぁん……。っ！ 梓史、くん……。っ♡♡」

（梓史くんの指が、僕の恥ずかしいところを……。っ。お腹の奥がキュンってして……。っ、蜜が溢れてくるのがわかる……。ッ♡ 怖いのに……。僕、どうして…

…ッ♡)

梓史くんが僕のおまんこを執拗に弄り続ける。拒絶しようにも、彼の圧に気圧されて、声が出ない。そうこうしているうちに、僕の下着は自分でも引くくらい、じっとりと湿り気を帯びていった。

「……あれ？♡ 空太くん、ここ、すごい濡れてるね？♡ こんなに感じちゃうんだね♡ 俺たち、身体の相性いいのかも♡」

「あ……、あ、あ……っ」

「指の音がすごいね♡ ヌチャヌチャって♡ 嬉しいな♡ 直接触ってあげるね♡」

「ひゃっ！？♡♡ あ、あああっ♡♡」

梓史くんが下着の隙間から、指を潜り込ませ、直接おまんこに触れてきた。ぬちゅ♡ という卑猥な音が密室に響き、僕は羞恥心で頭がどうにかなりそうだった。